

アンダルシアの強い日差しが肌を焼く。コルドバ近郊のセロ・ムリアーノは時間が止まったように静まり返っていた。訪れたのがちょうどシエスタ、つまり昼寝の時間だったのだ。

アンドレ・フリードマンがロバート・キャパとして世界中にその名前が一躍知れわたることになったスペイン内乱、いわゆる市民戦争で崩れ落ちる兵士▽を撮影した村である。

村人たちが起き出した午後4時過ぎ、私は通訳兼ガイドの歴史学者フロレンティーン・ロダオ(43)と一緒に、村のメインストリート(と言っても車だと10秒足らずで通り過ぎてしまうが)の中央にあったレストランに入った。事情を説明すると、店主のファン・フォセ・オブレロ・カストロ(43)は「そう

# ロバート・キャパ

## 知られざるその素顔

柏木 純一

撃たれた兵士役になり、フロレンティーンをキャパ役にして写真が撮られた1936(昭和11)年当時の撮影状況を再現しながら次のように説明した。

「ここは谷をばさんで共和国軍とフランコ軍とが対峙していた最前線だったのです。キャパは塹壕の下の方でカメラを構えていたところ、兵士は突撃しようとして塹壕から飛び出した瞬間に撃たれたのです」

確かに現在でも塹壕と思える溝があり、近くには共和国軍が前線本部として使っていた家が朽ち果てたまま残っている。持参した写真集の写真と見比べてみても、構図も背景もぴったりであった。

それにしても——ファン・フォセがキャパの写真にどうしてこれほど詳しいのだろうか。私の素朴な疑問に彼はこう答えた。

の疑問の声があがったのも事実である。偶然にはあまりにもデキ過ぎている▽前後に撮られている写真を見る限り戦争の緊張感が感じられない▽などがその根拠だった。

しかし、この論争はヒリオドが打たれている。スペインのアマチュア歴史家マリオ・プロトンスが崩れ落ちる兵士▽の身元を60年ぶりに割り出したのだ。

それを伝えた英オプザーパー紙によれば、兵士はスペイン南部の町アリカンテ郊外アルコイ村出身の製粉所工場で働くフェデリコ・ボレル。当時24歳。戦闘があったのは9月5日で、頭に銃弾を受け両手を広げながら倒れ落ちていたのを友人が目撃したという。

撮影現場から戻った我々に、共和国軍の一員として市民戦争に参加したマヌエル・ラミレス(88)と、フランコ側に立ったアントニオ・マルティン・カバニージェス(92)は、遠い記憶の糸をたぐり寄せながら戦争の悲惨さや愚かさを異口同音に語った。

35万人以上の尊い命が奪われたスペイン市民戦争……。実はキャパ自身もこの戦争で最愛の人を失っているのだ。恋人のゲルダ・タローである。 — 敬称略



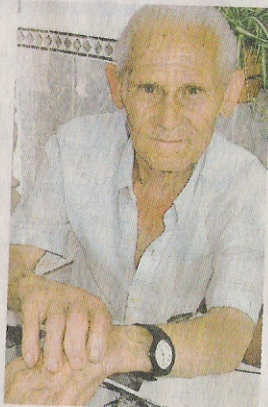
「崩れ落ちる兵士」の状況を再現するフロレンティーン・ロダオさん(手前)とファン・フォセ・オブレロ・カストロさん



キャパの名前が世界中に知れ渡ることになった「崩れ落ちる兵士」(東京富士美術館蔵)

没後50年記念写真展「知られざるキャパの世界」(毎日新聞社など主催) 4月から東京都写真美術館。その後、美術館「えき」KYOTO(JR京都駅ビル内)、福岡アジア美術館(福岡市)などで開催

# その丘、その場面、そして今



㊦スペイン市民戦争でフランコ軍側に立って戦ったアントニオ・マルティン・カバニージェスさん

㊧共和国軍側の兵士だったマヌエル・カルボ・ラミレスさん



た古老まで紹介してくれると言った。

彼によると、ここセロ・ムリアーノは鉱山の町として栄えたが、閉山に伴い現在の人口は約1500人。住民の多くがコルドバにある軍事施設に通って働いているという。

キャパがへ崩れ落ちる兵士Vを撮った場所は、店から車で5分ほど走ったブッシュが生い茂る「トリアルバレスの丘」の山頂付近だった。標高645m。眼下にはアルコレアの町が箱庭のように広がっている。ファン・フォセは自分が

「実は……。数年前にドイツのテレビ局が（スペイン政府の）お役人と一緒にやって来て、今回と同じように写真が撮影された現場を探し出し、確認しているんですよ。だから私も知っているわけです」

正直な人である。が、再び、それにしても——なのだ。フランコ軍が陣取っていた丘までは、谷をはさんで最短でも200m以上もあるのだ。この距離で当たるのだろうか？

決定的瞬間をとらえたこの写真に関しては以前、実は「やらせ」ではないかと